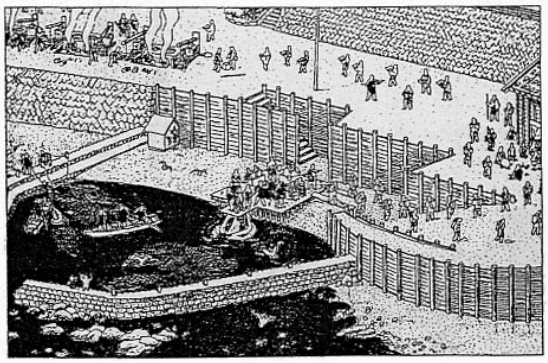
利尻島に残るニシン場の袋澗

利尻富士町教育委員会

・袋澗（ふくろま）とは？

春先の岩礁地帯に産卵のため来遊するニシンを漁獲するための施設。春先は南西の風が強く海が荒れるため、安全な澗の造成が必要でした。袋澗はそのために開発された技術で、袋網のニシンの一時保存（７～１０日間）のほか、船溜り、避難港としても使われました。



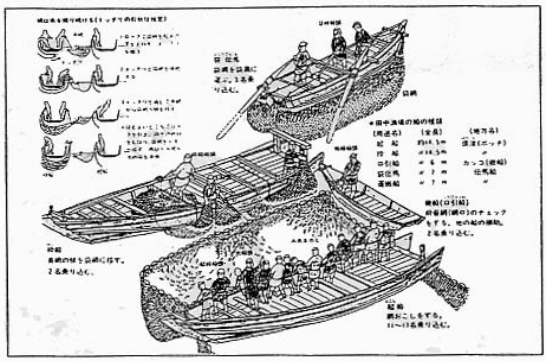


図6　明治年間袋澗漁法模式図（田中漁場）

・袋澗の分布

ニシンのとれた日本海沿岸に多く、積丹半島（泊・神恵内など）をはじめ、利尻・礼文などの岩礁地帯によくみられます。

利尻島では、御崎や南浜、仙法志などの岩礁地帯に多く、かつては３５ヶ所あったとの記録があります。現在その面影をよく残しているのは、鴛泊と仙法志支所前、久連の３ヶ所です。

・仙法志（伊藤の澗）

伊藤家（青森県小泊村）は幕末期から島での漁に関わるようになり、仙法志に移住した明治２３年、伊藤米八・磯八が開いた漁場で建網を経営しました。のちに秋田屋の澗とも呼ばれ、袋澗以外に貨客船の乗降にも使われました。

元村の海岸

改造された澗（御崎公園）

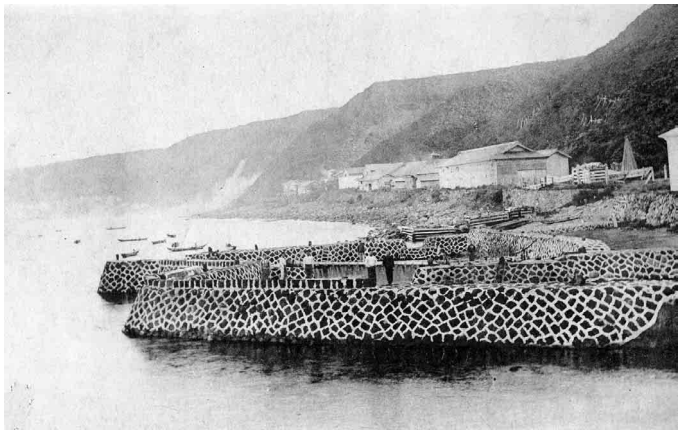
・久連（平田の澗）

平田豊作は明治２６年鬼脇に来て海産仲買商となり、３１年仙法志に移って昭和７年まで久連一帯に１０ヶ統の漁場を持ちました。

また、仙法志水産会会長を務めるなど有力者でもありました。

袋澗には珍しく、鉄心が入った構造です。

大正時代のころ



・鴛泊（泉の澗）

旧柳谷漁場の澗で、泉八三郎氏が所有していたものです。堤体の保存状況は良好。